

一一いちいちのはなのなかよりは

三十六さんじゅうろっぴゃくせん百千億おくの

光明こうみやうてらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

ようになり、それが私自身の今の課題となっていていま

最近では「移住者促進」に向けた様々な活動に参加させていただい

「祖父の家」であったお寺を継がせていただいて丸20年が過ぎました。

引越してきた当時のことを思うと、「お寺ばなれ」や「墓じまい」などお寺を取り巻く状況も随分と変わってきたように思います。

特に、過疎地域にある私のお寺は人がいなくなっていくことが何よりの問題で、お寺を復興するためには地元を活性化することが一番大事なことになるのではないかと考える

います。地元を知っていただくイベントを企画したり、大規模マルシェを開催したり、里山保全に向けた取り組みのお手伝いをさせていただきな

かで、自治会や消防団、地元の祭りの実行委員にも入れていただき、地域に携わる時間の方が、法務をしている時間より長くなってきました。

しかし、「お寺さん」としてお寺に居るだけでは繋がりを持ち得なかった人たちと関わることで思

いがけないところから縁が繋がることもありま

す。相変わらず人口も、それに伴うご門徒さんも減っていく一方ではあり

ますが、お寺に来てくれる人は増えてきたというなんとも不思議な状況で

す。

一一いちいちのはなのなかよりは

／三十六さんじゅうろっぴゃくせん百千億おくの光明こうみやうてらしてほがらかに

はさらになし

この先も、住職としてお寺に居られるのか、生活はどうしていいか、子どもの将来、町に行く末……。それらの不安がかき消されたという経験は今のところありませんが、私が今こうしてお寺に住み、なんとか生活させて

いただいていること自体が、照らされ、救われていることなのだろうなど日々の生活の中で、近頃は特に感じております。

(畠中 光炎)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 123頁

「知ってる？ 仏事のあれこれ」

「報恩講」ってなあに？



「お霜月は報恩講のこと」

八尾市 慈願寺 鹿崎 正明

親鸞聖人は、弘長二（1262）年十一月二十八日に、九十歳で亡くなられました。東本願寺では、毎年十一月二十一日から二十八日までの七昼夜八日間報恩講が勤められます。ですから報恩講のことを「お七夜」とも呼びます。

旧暦十一月は「霜月」といい、上に「お」をつけて「おしもつき」というと報恩講のことを意味しました。「提灯の下に遊ぶ子お霜月」（吉岡 禅寺洞）

など、俳句の季語としても使われていました。昔、私の育った在所では、在家の報恩講の勤まる日の夕方に「今日は誰それさんの家の報恩講さんやからお参りしてや」と子供たちが村中を触れて歩いたそうです。その後、ご門徒宅で報恩講を勤めるのですが、「お勤めの後、毎晩同じ顔ぶれにお話をするのは、若い時は大変やった」と晩年に父親が話していました。報恩講のお勤めの最後

には、「恩徳讃」と呼ばれている和讃が勤められます。

如来大悲の恩徳は
／身を粉にしても報
ずべし／師主知識の
恩徳も／ほねをくだ
きても謝すべし／

親鸞聖人自らが恩徳と感じられた、阿弥陀如来の大悲と、師主知識とはどういうものなのでしょう。

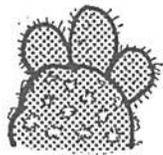
親鸞聖人は、お釈迦様の説法に説かれる法蔵菩薩（阿弥陀如来）の長い修行も、親鸞が信心を得るためだと受け取られました。お釈迦様以後、親鸞聖人にまでお念仏の教えを伝えてくださった七高僧と呼ばれた、インドの龍樹菩薩・天親菩薩、中国の曇鸞大師・道綽禅師・善導大師、日本の源信僧都・法然上人、そし

て善知識の方々のご苦勞も深い恩徳と感じ取られました。自らを「罪惡深重の凡夫」と明らかにされたご恩に対して、身を粉にしても、骨が砕けても報ずべしとうたわれ、法然上人の「ただ念仏すべし」の言葉に出遇われた親鸞聖人は、煩惱に振り回される身を深くうなずいていかれました。

親鸞聖人に出会われた人たちや、ご縁をいただいた人たちは、聖人の残された言葉を手がかりに、何度も何度も、念仏のいわれを確かめる集まりを持たれました。年に一度の御命日にあたる集まりを本願寺三世の覚如上人が、「報恩講」として伝えていかれ、今も続いています。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ <243>



おじさん
みずからを
かえりみる

